

〔曲名〕 La Pesarese

ラ・ペザレーゼ

〔曲種〕 Sinfonia

序曲

〔作曲者〕 Giuseppe Filippa

ジュゼッペ フィリッパ

〔編曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

作者ジュゼッペ・フィリッパは「町の祭典」や「山国の婚礼」を書いたヴィットリオ・フィリッパの父親で、

本曲の外に「滅びし国」「四旬節の謝肉祭」「怯える小鳥」「懐しき追憶」等の佳曲を書いている。

ペザレーゼとは「ペザロの町の人々」或は「ペザロ気質」と云うような意味である。

ペザロはアドリア海に面したイタリアの町で、歌劇「ゼビリアの理髪師」「ウィリアム・テル」等で著名な作曲家ロッシーニの生地である。

ペザロ市民はこのことを誇りとし、ペザロ気質というものを大切にしている。

作者は之に敬意を表して吹奏楽曲を作曲、ペザロの町に捧げた。

従って本曲にはロッシーニの歌劇「セミラミーデ」の一節を思わせる箇所が随所に現れる。

1899年に発表された。

本作曲者については遺憾ながら知ることが出来ないが、

ペザロの人々の誇りとしているロッシーニは幾多のエピソードの持主なので少し紹介しておこう。

ロッシーニにはDiTanti Palpiti（心のときめき）という誰知らぬ者のないほどの歌がある。

パリーのショーゼ・ダンタンの通りを、或る日貧しい流離の男がオルガネット（携帯オルガン）でこの「心のときめき」を弾きながら歩いていた。

ある家の前にさしかかった時、突然「もっと早く！もっと早く！」という叫び声が洩れてきた。

「旦那さま、何と仰しゃいましたでしょうか」

「もっと早く弾くのだ！アレグロだ！」

「旦那さま、私はそんなに早くは弾けません」

作者ロッシーニは出てきてその見知らぬ男からオルガネットを取り上げ、正しいテンポで弾いてみせた。

作者とは知らぬその男は恐縮して

「旦那さま、お教え頂いてありがとうございました」と礼を述べて立ち去った。

翌日、オルガネットの男は、今度は申分のないテンポで「心のときめき」を弾きながらその家の前を通りかかった時、

「うまい！うまい！その調子」と、

かの家から感歎の聲がかかり、その男の足許にルイドール金貨が投げ与えられた。

さすらいの男は気を失うばかりに喜んだがロッシーニは遂に姿を見せなかった。

ロッシーニは功成り名を遂げて晩年の永い期間オペラのような大作品には手を染めず、ピアノの小曲を書いて楽しんだ。

之等には「第三流のピアニスト、ジョアッキーノ・ロッシーニ」と署名がしてある。

1971年5月12日発行

イタリアマンドリン百曲選第11集より